

あゆみ通信

VOL. 192

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会)推薦員連絡協議会
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

親鸞のことば

人に支えられて生きている

御ころざしのぜに三百文、たしかにたしかにかしこまりて、賜りて候う

「親鸞聖人御消息集」

関東から京都に戻った親鸞には、門侶から度々手紙が届いていました。門侶が念仏の教えや生き方に迷った時に親鸞を頼ったのです。そのやり取りの中に門侶を案ずる親鸞の姿を感じることが出来ます。

この言葉は、門侶からの「ころざし」(念仏を伝えるためのお金)を受け取り、それに対してお礼を述べたものです。一般的に見て、仏教者として大成した親鸞ですが、こうして周りからのころざしに支えられて生活していたのです。御同朋御同行の精神が、確かに親鸞に息づいていたことが知られます。

(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より)

お朝事に思う

恥ずかしなから、80歳になって、やっとお朝事が勤まるようになった。ある日、お朝事を終えて過去帳を見ながら、つくづくとはあるが、自分がいかに親不孝であったかを思ったことである。祖父母や叔父は仕方がないとしても、弟や妹がいたのに、父母から何も聞かされていなかったことに気が付いた。父は1994年に亡くなったが、母は2004年まで生きていたというのである。

思えば、小学生の時や中学生の時、四天王寺や一心寺、お正月には大谷祖廟に連れていかれていたことを思い出した。弟や妹が納められていたのだろう。

1940年代の月参りには、何故か、心願寺の亡き松井恵光先生がおいでになっていた。その後、先生が大谷教区のお仕事が忙しくなり、即應寺の藤井善隆当時住職とご縁を繋いでくださると聞いた。ご縁と言うのは本当に不思議である。以来、有難いことに今日まで続いている。この後は、後日に。(本)

大阪教区宗祖親鸞 聖人御生誕850年・ 立教開宗800年慶讃 法要にご参詣を



いよいよこの4月17日(木)から20日(日)に、大阪教区宗祖親鸞聖人御生誕850年・立教開宗800年慶讃法要が行われます。お釈迦さまの教えを私たちに伝えてくださった宗祖親鸞聖人のご誕生を喜び、真宗の教えを私たちは依り処に出来ているかを問い直す機会です。難波別院境内では、いろいろな催しが開催されます。

第2組各寺院からも多くのご住職や寺族、ご門徒さんが、分散されてのご参詣となります。皆さんは、何時ご参加でしょうか。お楽しみください。

第40回同朋大会執行

2025年3月15日(土) 午後2時から、難波別院同朋会館講堂を会場に、2025年第2組はじめての仏事の第40回第2組同朋大会が難波別院同朋会館で開催され、天候不純のなかを組内の住職や坊守、寺族と門徒、推進員等69名が参加し、勤まりました。

武石専行寺住職の司会で、真宗宗歌斉唱で開会、池田英



二郎副组长(宗恩寺)の調声で、正信偈、同朋奉讃念仏讃を全員で勤めました。そして、墨林浩組長(光照寺)の開会のご挨拶がありました。

記念
法語は、
真宗大谷
派教
学研究
所所員



で、兵庫県明泉寺住職の名和達宣先生が、「立教開宗の願い」という講題でお話されました。

先生は、冒頭、立教開宗の意味について、「私自身が教えに立ち、『宗』が開かれること。」「宗」とは、故中川皓三郎先生は「扇のかなめ」だといわれたと話されました。



そして、慶讃法要のテーマ「南無阿弥陀仏一人と生

まれたことの意味をたずねていこう一」について、「南無阿弥陀仏」が入っているのは、宗門が危機的状況を迎えており、私の存在との関りを問うていると話されました。

続いて「立教開宗」の歴史的経過を詳しく説明してくださいました。

休憩後は、池田勇諦先生の「南無阿弥陀仏は、私たちの存在の本名である」という言葉に接した先生が、ご家族と



の出来事を通して気付かれた「仏の名を呼ぶこと。その名には大切なことを思い出し、本来の帰るべきところに帰って欲しいという願いが込められている」と結ばれました。

終了後、閉会に入り、中嶋ひろみ門徒会会長(光照寺)から4月の慶讃法要への参詣と第2組の仏事へのご参加をお願いし閉会しました。

第2組開法会いよいよ

今年の開法会が教区慶讃法要の関係で、5月から下記の通りのスタートとなります。

昨年の学びで「初めて正信念



仏偈」を「依経分」を終えて、今年は「依釈分」に入ります。

講師は昨年同様、

5月、6月を大橋恵信先生(18組遠慶寺)。7月、8月を宮部渡先生(15組西稱寺)。

9月、10月を廣瀬俊先生(17組法観寺)がそれぞれ、ご担当されます。ご期待ください。

いずれも午後2時開会、

参加費500円です。第1回

5月24日(土)

会場 稱念寺(天王寺区夕陽丘町)

第2回 **6月17日(火)**

会場 専行寺(天王寺区堂ヶ芝)

如是我聞 3/15 名和先生法話聞書 佛足寺 細川 克彦

はじめに名和先生は講題の「立教開宗の願い」は第2組から依頼されたものであり、ちょうど大阪



教区において4月から「宗祖親鸞聖人御生誕850年・立教開宗800年慶讃法要」が勤まることに対応している。

「立教開宗」は宗派が開かれたことに止まらず、一人ひとり(私自身)が「教えに立ち、宗が開かれる」という積極的な意味に捉え直して欲しいという宗門の願いも話されました。

ご用意されたレジュメに従って話され、第1節では、「真宗教団と立教開宗」と言うことで歴史的なお話、『教行信証』に記述されている1224年(元仁元年・宗祖52歳)をもって『教行信証』草稿本完成とする説に従って、1876年(明治9年)に真宗4派



の協議によって開宗の年とされたと。

第2節では、「宗祖と立教開宗一末法と言う時代」と言うことで、宗祖が「己に以て末法に入りて六百八十三歳なり」と記述され、宗祖聖人が悲しみをもって自ら「底下の凡愚」であるとおっしゃられていること、そして末法の時代とは「五濁悪世」と言われる時代であること、また末法(1万年)の時代では、衆生(ことに

大推協通信

大推協(大阪教区同朋の会連絡協議会:細川克彦会長)では、開法活動として、公開講座を下記の通り開催されます。皆さまのご参加をお待ちします。

公開講座

6月16日(月) 午後2時

日時 会場 難波別院同朋会館講堂

講師 里雄康意先生

(元真宗大谷派宗務総長・大垣

教区第17組緑林寺住職)

参加費 無料



人間)が滅尽していくと。それは邪見(自分を中心にして、自分の考えが正しいと思い定めて、他の人を裁いていく)がいよいよ人間を捉えていく時代であると。そして、末法の時代の衆生の救済のために『無量寿経』では「ただ念仏」という教えが説かれていると。

第3節では、「悲歎と慶嘆」という題で、宗祖は罪業の自覚と言う深い悲しみと表裏一体となって、「ただ念仏」の教えに出遇った慶びを述べておられると。

また、ある方のお話として、困ったときやひどく疲れた時に、授かった娘の名を呼ぶと、愛と言うか、願いと言うか本来に帰るような深い安らぎを得るというお話をされました。

最後に、今度の大阪教区の慶讃法要を、「南無阿弥陀仏」と私との関係をたずね直す機会として欲しいと結ばれました。